

伝統的行事を巡る動物愛護思想の聞き取り調査

——なぜ、伝統的行事が動物愛護運動で象徴的に扱われるのか

阿部 一 貴

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 博士前期課程 2 年

1. はじめに

本プロジェクトでは、三重県桑名市多度町の多度大社と同県員弁郡東員町の猪名部神社に伝承される無形民俗文化財、上げ馬神事に対して、2002年より抗議活動を展開してきた動物愛護団体A会代表者の伊藤氏（仮名）に聞き取り調査を行った。聞き取り調査は2016年9月上旬に東京都内で行い、その録音データから、約2万5千文字の会話原稿を作成した。本報告では、多岐にわたった報告者と伊藤氏のやりとりから、「なぜ、動物愛護運動で伝統的行事が象徴的に扱われるのか？」という問いに注目してインタビューダイアログを紹介する。この問いは、上げ馬神事実践地区の地元住民たちがよく口にする「なぜ、上げ馬なのか？」という疑問を参考に作成したものである。報告者は、2015年より行ってきた多度町におけるフィールドワークのなかで、「動物をかわいそうだと思う気持ちはよくわかるし、うちの祭りも多くの変更を行っている。でもなぜ、競馬とか、牧場とか、動物園とか、動物をもっと扱うところは他にたくさんあるのに、これほど上げ馬神事ばかりをバッシングするのか」という内容の素直な問いかけを頻繁に聞いてきた。これを受けて報告者が初期調査を行ったところ、確かにA会は上げ馬神事への取り組みを団体の主業績とするほど重要視し、上げ馬神事に対する強いこだわりを見せていた。ただ、A会についての調査を進めるなかで、なぜ彼らが、あえて上げ馬神事のような伝統的行事を急務の動物愛護問題とするのかは明確にならなかった。A会は、現代日本社会に動物愛護思想を定着させるという大きな目標をもっているが、そこで、至ってローカルな文脈にあり、他の地域では真似しようにない上げ馬神事を、日本の主要な動物愛護問題（ペット遺棄問題、実験動物問題、災害動物問題など）と同列またはそれ以上の問題として扱う理由が不明瞭であった。したがって、報告者は本プロジェクトを通して、地域住民たちの「なぜ、上げ馬？」の問いを建設的に捉え直し、上げ馬神事という伝統的行事がA会

にとってどのような象徴性を持ち、動物愛護問題としてどのような重要性が見出されているのかという点を明らかにしようと試みた。以下では、はじめに多度大社の上げ馬神事を例に当神事の簡略な説明を行い、事前調査を紹介し、聞き取り調査から得たインタビューダイアログの一部を記載したうえで考察に入る。

2. 上げ馬神事と動物愛護団体による告発

上げ馬神事は、多度大社と猪名部神社の両神社において約700年の歴史があるとされ〔多度大社 2016〕、現在では猪名部神社の大社祭り（4月1・2日）、多度大社の多度祭り（5月5・4日）において毎年奉納されている。多度大社は、御神体とされる多度山の麓にあり、神社境内正面の大きな階段をもって多度町の集落と通じている。集落から見上げると階段の左側に沿って、上げ馬神事に用いる馬場（横幅約2.5m、長さ約20m、高低差約10m、両壁が石垣）が設置してある。馬場は集落から平面に続いて坂を上るにつれて弧を描き急斜面になり、坂の頂上には、約2mの垂直な土壁が立つ。「御厨（みくりや）」と呼ばれる多度町7地区の男たちが上げ馬神事に参加し、そのうち1地区が稚児を、残りの6地区が「祭馬」（神事に使う馬）と「ノリコ」（祭馬に乗る騎手）を用意する。上げ馬神事で花形とされる役割を担うのは、各地区の約15～23歳の男性で構成される「青年会」という祭祀組織である。各組の青年会は自身たちの「坂上げ」（上げ馬神事で馬に坂を上らせる手順）の順番になると、馬場内の決められた場所に並び、体制を整えることで「坂をつくる」。準備が完了すると、一人が坂の頂上に立ち、自身の半纏（はんてん）を脱いで頭上で振る。すると、約200m手前の開始点で待機する地区の大人らが同じく半纏を振って合図を返し、ノリコが乗った祭馬を坂に向かって放つ。馬がためらわずに全速力で馬場を駆け、急坂を登り、人馬ともに坂の頂上の土壁を飛び越えれば、神事は成功とされる。

ところが、2010年5月、こうした上げ馬神事の伝

統的实践に大きな衝撃を与える出来事が起きた。東京に拠点をおく動物愛護団体A会と三重県内の動物愛護系NPO法人C会が共同し、2009年に多度町で行われた上げ馬神事について、動物愛護管理法違反にあたる行為があったとして三重県桑名警察署に告発状を提出した。告発を受けた桑名署は、2009年に両団体が撮影した証拠映像とされるものを基に捜査を行い、2011年2月、多度町の祭り関係者複数名を津地方検察庁四日市支部に書類送検した。同年10月、検察庁は嫌疑不十分などを理由に本事案を不起訴とした。後日、A会が不起訴の理由について津検察庁の担当検察官に伺ったところ、「動物愛護管理法に、殴る、蹴る、精神的に追い詰めるなどの行為が虐待であると記載がない・その暴力行為によって、馬に異常が認められない・この暴力行為に対して、他の人から告発がない・一般の人は虐待とっていない」などと指摘されたようである¹⁾。結果は不起訴であったが、本告発によって上げ馬神事は地域内外で動物愛護問題として明確に認識されるようになった。

3. 事前調査

伊藤氏への聞き取り調査に先立ち、上記告発の背景にあった出来事を詳細に見直した。すると、告発成立の大きな要因に、上げ馬神事を動物愛護問題として再定義し、社会問題として位置づけようとするA会の多大な努力があったことがわかった。

A会が初めて上げ馬神事の現地調査に訪れた2002年のことで、そのきっかけは、U会（馬の福祉問題に取り組む動物愛護団体）から、「こういうひどいお祭りがあって、それをなんとかしてほしい」と依頼されたことであった²⁾。それ以降、A会とC会は毎年現地調査を行い、収集したデータを上げ馬神事に対する抗議運動の根拠として、団体ウェブサイト、団体の会報誌、改善要請文書（各種行政窓口、多度大社、御厨会、テレビ・新聞媒体へ送付）、政府への提案資料などで提示してきている。また、A会とC会は2009年（証拠とされる映像を撮影した年）にも告発状を桑名署へ提出していたが、当時、署はこれを受理しなかった。不受理の対応を受けた両団体は、2009年から2010年にかけて、「虐待のない上げ馬神事へ」の文句を掲げた「上げ馬神事問題」の認知と改善を求めるキャンペーンを展開した。キャンペーンでは、例えば、「上げ馬は人にも馬にも危険な行為です。上げ馬神事では、常軌を逸した固定障害を越えさせるために、馬

に対する様々な虐待的暴力が行われています。」などと記す赤色のポスターを作成し、三重県や地元地区の各所に配布した。このポスターの裏面は「暴力行為をやめさせるために、貴方の声を裏面の宛先に送ってください。」として、読者に要望書の作成と送付を訴えていた。要望書の宛先として住所が記してあったのは、三重県知事、三重県警察、三重県教育委員会、三重県市長、東員町長、東員町教育委員会、多度大社、猪名部神社であった。ポスター以外にも、同じ宛先を記した要望書が、三重県のみならず全国の動物愛護関連ネットワークに拡散されていた様子である。その名残としてか、最近では減少傾向であるものの、上げ馬神事に関する苦情が三重県庁に依然として寄せられ続けているという³⁾。こうした要望を通じてA会は、上げ馬神事の伝統文化としての価値を論じ、三重県に対して上げ馬神事の県指定無形文化財登録を取り消すように求めた。そこで三重県は、A会との討論会を開き、三重県文化財保護新議会（教育委員会属）に2010年5月の多度町の上げ馬神事が「文化財指定の価値を有しているかどうか」を検討する調査を依頼した〔三重県教育委員会 2011〕。同月下旬、桑名署は告発を受け入れ、上げ馬神事を動物愛護管理法違反事件として捜査し、地元の関係者数名を書類送検した。ちなみに、以下のインタビューダイアログで触れられるように、2010年以降の猪名部神社の上げ馬神事では、坂の頂上の垂直の壁が傾斜に変更されている。

こうしたA会の活動や価値観は、一見すると、上記で紹介した担当検察官の説明のように一般的な見解とは乖離がある印象を受けるかもしれない。ただ、この事前調査でさらに明らかになったのは、上げ馬神事に対するA会の動物愛護運動や告発行為が、彼らの個人的な思想と興味から生まれているのではなく、むしろ、環境省が管轄する動物愛護管理法の普及啓発、運用、改善を目指す動物愛護推進政策の運営下で発生しているということであった。A会は、1999年より5年を目途に改正され続けている動物愛護管理法の成立に深くかかわってきている団体である。上げ馬神事は、A会の資料提出や要望等によって、日本の動物愛護管理法を作る上での参考問題事例として認識され、伝統文化とはいえども「社会通念上」は動物虐待とみなされる代表的事例として議論に持ち出されていた〔環境省 2011〕〔衆議院調査局環境調査室 2012〕。

4. インタビューダイアログ⁴⁾

——挨拶後、伊藤氏が新しく代表に就任したペットの災害対策を担う法人、S会とその資金についての会話を経て——

阿部：……その資金集めの仕組みをお聞きしたいのですけど、A会については（…）

伊藤氏：A会は、今崩壊をしまして、ネットの集まりだけになりました⁵⁾。事務所をなくしました。財産が、資金が集まらなくなって、事務員と事務所を維持するだけの費用を会費だけで集めるとすごい金額になるので、ならもうやめちゃいましょうと。事務局の人もそこそこを理解してくれたので、今年から、事務所は無くなりました。……それで、ネットの世界だけでつながっていようと。だからそれで一応やっているのですが、会議ができないために共通認識がどうしてもずれやすくなる。……でもこの間、環境省とディスカッションしたのですが、その時は全員集まりましたよ。で、一応は方針がある程度出ているので、その方針に基づいてディスカッションしたのですが、今度の局長が、この人は私がすごくなんとか期待したいなあと。人によってえらい差があるんですけど。で、真っ先にこの法律（動物愛護管理法）を動物福祉法に変えたいのですが、と言ってくれて理解してくれている。これを本物にしたいってのが彼には見えている。いやあ、今までにない活動をしてくれるのではないかな。〈阿部：次回の改正に向けてですか？〉そう、次回の改正の時には、だから、種まいてくれですよ。名前を変えろと。名前を変えると中身がそれに基づいて変わってくるのは当然なんだけど。……

阿部：A会は普通の動物愛護団体とは異なる体制の団体ですよね？

伊藤氏：A会は、その動物愛護団体っていろいろな考えを持った団体がいっぱいあるんですけど、それが結集して、集まって、A会を結成するって言うのが私の願いだったのですが、残念ながらそこまではしていない。結局、今残っている団体が一部でしかないわけでしょ？ 一部の団体だけで運営するっていうのは偏りがどうしても起こりやすいし、発言の強さなんか振り回される傾向があるわけじゃないですか。けども、私は、どんな意見があってもそれはそれで意見だから汲み取れよってのがある。〈阿部：ホームページでは9つの幹部団体で構成していると書いてありますね。〉でもう、それしかないと考えていい。……

阿部：9つの団体はA会に人員や資金を提供していますか？

伊藤氏：今はゼロです。資金ゼロ。で、ゼロだけどやれるかなというのが、一つのチャレンジ。〈阿部：昨年まではあった？〉もちろん、はい。皆さんに会費として出してもらっていましたから。ですから、団体会費と、個人会費とか、いろいろ集めましたから。で、問題は、その、大口資金を提供してくれる組織や団体がない。過去には、イギリスのスポンサー、ドネーションね、から資金が送られてきたりして運営できてたんだけど。で、上げ馬神事をやっていたから、余計海外からお金が集まってきた最初の頃は。けども何年も同じことをやっているから、向こうだってしびれ切れ始めて、まだ解決していないのかと。〈阿部：そういうものですか。〉そりゃそうですよ、向こうは有言実行を求めているんだから。はっはっ。5年くらいはサポートしてくれましたけど、これ以上は無理ですと。……

阿部：1999年に始まった一連の動物愛護管理法の改正運動と、同時期に盛り上がった日本の動物愛護運動の中で、A会は草分け役であったようにも見えるのですが、実際はどうでしたか？

伊藤氏：それは言えます。最初の改正のとき（1999年）に、A会ってのが、ものすごく活発にやまして、データの収集も含めて。それから項目ね。改正案の、こう改正してくださいってのを作っちゃって。そこまでやりましたから。一条一条、名前まで含めてこれはこうしてくださいってやりました。で、そこまでやってたので、今後の方向性も含めて7割近くがそうになった。そのあと改正するのはこういうところだなんていうのも〈阿部：7割近くがA会の（…）〉うん我々の求めている法律の中身。ところが今の動物取扱業に関することなんて当時全くなかった、全然関係ないところから来たんだ。……

阿部：法改正にA会がどのように関わってきたかというのをお聞きしたいのですけれど（…）

伊藤氏：あ、あのね、環境省がまず改正のための審議会（中央環境審議会）を開くんですけど、その中には委員がはいっていますね。で、その委員を通じて、あるいは、口頭、文書でもって環境省にこういうところを改正してくださいと依頼をするわけですよ。〈阿部：例えばこちらは平成27年度の審議会メンバーのリストですけど、ここでA会に関係ある人はいますか？〉あ、今度の改正では、委員の中には、ほとんど入っていません。Yさんだけです。……

阿部：で、審議された改正案が国会に送られて国会審議に移るといこと〈伊藤氏：うん、そうです。〉ですけれども、国会議員に対してロビー活動をなさるとウェブでは書かれています（…）

伊藤氏：本来はしてたんですが、今回東京都知事になった小池百合子先生が、自民党の動物愛護議連の会長だったんだ。こないだの4月に会ったばかりで議論したばかりだった。都知事に立候補しちゃって、で、そこで事務局をやった方たちとかとは、今もお会いしてるんですけど。〈阿部：そこでは、主に何をお話しに？〉うん、だから今回の熊本地震の時に対策をするために、どんな風になっていますかって質問受けたりして議論したんだけど。……

阿部：ご活動のなかで、動物愛護思想は、欧米から輸入しているという認識ですか？

伊藤氏：今は、その、モデル的に私は受け取っている。動物福祉と、5つの自由っていう考え方もあるのですが、これも欧米の考え方で、西洋諸国の法律なんかをチェックしているとほとんどが大動物も含めているんですよ。ペットだけの考え方じゃないんですよ。動物福祉下にある動物全てに対してですから……時代の流れですよ。

阿部：動物福祉や5つの自由で、すべての人と動物の関係ってことを考慮すると、とても広い範囲になりますね。そこでは、飼育頭数の多い実験動物、農場動物、ペットなどが重要な議題になるのは当然ですが、一方で、なぜ多度の上げ馬神事が注目すべき事例になるのですか？ 規模や頭数で考えると、特に目立ちませんが。

伊藤氏：あのね、個々の動物が、可哀想な状況に置かれていることを私たちは指摘しているのですよ。数ではない。可哀想な状況に置かれている動物がいるならば、それを、そういう風にさせたくないっていうのと、助けたいっていうのがある。当然なことです。子供が思うことと同じですよ。子供があれ（上げ馬神事）を受け入れられるかどうかというのが、一つの基準です。

阿部：上げ馬神事とは、どのような問題なのですか？

伊藤氏：問題か。問題としてはその、上げ馬神事は、当初、一番最初のあり方は最悪もいいところだった。最初行った時に、なんてむっちゃくちゃなことしてくれるんだって。〈阿部：最初に行かれたのは何年ですか？〉2002年が最初です。このU会ってのがあって、ここが、こういうひどいお祭りがあって、それをなんとかしてほしい、ぜひ一緒にチェックしてくれませんか

かって言われて初めて見に行った。なんていうかな、もう、あっけにとられたっていうか、ひどすぎちゃって。ここまで、よくやれちゃうなっていうのがあって。それで、周囲の人たちの顔色、ね、目つきを見て、うわーって。楽しんじゃってるじゃん、生き物いじめて。この世界を治すってのは、これは、そうとうやらなきゃいかんかと。で、最初の段階でその年にもう全部書いて、知事から、県会議員まで、県会議員にも全部ビデオも送りましたから。全員にメッセージつけてね。一人だけ返ってきました、こんなもん見たくないって。それと、県の方には、祭りは尊重する、だから祭りの中身を変えてくれってね、そういう依頼をしました。……お祭りにかこつけて、若い子が吞んでいる世界は、今日にもよくないでしょう。だって、その無形文化財はどこを指定してるんですかっていう。〈阿部：文化財としてどうなのかということですか？〉そうです。子供の健全育成というのが前提にあるはずでしょう？……

阿部：2000年代前半の上げ馬神事は、伝統文化として（…）

伊藤氏：最悪だった。これが伝統文化かよって。〈阿部：動物愛護思想の到達していない空間であったということですか？〉そう。そしてこれは神社に奉納されるものだけど、神社はそれを受け入れちゃっている。で、神社に文句いっても、奉納されている立場ですから何も言えませんかという答えが返ってきたわけ。……

阿部：上げ馬神事に対する例年の抗議運動を一つの流れで整理しますと、監視に行って、データを集めて（…）

伊藤氏：監視するという言葉が正しいかどうかはわかりませんが、まあ調査ですね。調査をして、問題があるならば指摘したい。〈阿部：指摘は各方面に？〉もちろんです。去年は、県や自治体、全部にしっかり手紙を出しました。一つも返事はありませんけどね。〈阿部：では抗議の形式としては（…）〉抗議じゃないです、こうしてくださいという依頼ですから、返事する義務はないんですけど。で、その指摘通りに直していただいているかっていうのが、次の年の調査ポイントになってくる。だけど、ここ数年、上げ馬神事そのものが国会議員の間で、特に多度大社の場合は垂直な壁が治ってないっていうのが、新しく基準にくわった酷使という、馬を酷使しているというのにあたるのではないかという議論が国会議員の中で起きていて。〈阿部：A会が指摘していたことですね？〉もちろん

そうです。〈阿部：A会が国会議員や審議会の中で上げ馬神事についてプレゼンしてきた？〉そうです、それで、項目の中に何を足せばいいのかということで、酷使が追加された。〈阿部：そうなのですか、上げ馬神事を事例として、酷使というのが追加された？〉そうです、はい。それ以外に、過去にヨーロッパでは馬を酷使してはいけないってのがあって、それが動物福祉法の中に入っていたわけですよ。酷使って言葉はかなり前から入ってたんですよ。ただ、日本では、その部分が指摘されていなかった。〈阿部：それで上げ馬を事例に？〉で、日本では馬を酷使するっていう状況が、農作業かなんかで、なくなっちゃいましたよね。すると日本で挙げられるのは、上げ馬くらいしかなくなっちゃった。……〈阿部：上げ馬がこれほど直接的に法律形成に関わっているとは知りませんでした。〉そりゃもう、環境省やなんかにこういう問題がありますよってのを言っ、なんとかしてくださいっていうお願いをずっとしてましたから。酷使っていうのは結局、今日本で使えるのは上げ馬くらいしかありませんもの。……で、私は、はっきり言って、今年は告発状を出そうかと思っていました。なぜかという、そういうこと（改善要請）をやっているのにもかかわらず、（上げ馬神事の現状を）変えてくれていないっていう。それはもう、告発状を出してもいいのになって。……〈阿部：すると、今年また告発するとしたら、〉うんまあ、するかしらないかはまだ考えているんだけど。というのはS会の問題が、動物を救済しなきゃいけないっていうのに追われてて、ね。で（告発状の）文書は、前の書き方とは全く違うジャンルで書くかなんかと思っている。もうね、役所的な、弁護士が書くような文体で面白く描いてもうまいかなかったでしょう。だから今度は違う文体で書いてみようかなんかと思っている。

阿部：ちょうど、酷使が動物虐待の定義として加えられて初めての告発になります。（「酷使」は、2012年に動物愛護管理法へ動物虐待の定義として追記された。）

伊藤氏：そうです、それが、酷使に当たるか当たらないかを。上げ馬が失敗ばかりなことや、雨の日は中止すべきだと言ってるんですけど、人馬にとって大変危険ですから。そこで強行するのは、さらに酷使になる。

阿部：つまりA会は酷使というのは、上げ馬神事を事例に提案して、それが法律化しているわけですよ。それで告発するということは、法律をテストするとい

うことですか？

伊藤氏：そうです、使えるか使えないか。それでね、実際に告発しないと、それ（上げ馬神事が動物虐待にあたるかどうか）を、判断しようとしなないんじゃないかと逆に言うと。……

阿部：三重県庁の担当者曰く、最近は上げ馬神事問題も改善傾向にあつて、一時はものすごい量の苦情が上げ馬に関して寄せられていたが、近年は減少傾向にあるとおっしゃっていましたが。

伊藤氏：猪名部が改善しているから、それに伴って多度も良くなるだろうと期待しているんですよ。

阿部：では、多度に関しては改善していないということですか？

伊藤氏：多度に関しては、究極のポイントがあるでしょ、そこが改めてなければ、これは、ずっと言い続けるしかない。

阿部：そのポイントというのは（…）

伊藤氏：垂直な壁。垂直な壁である限り。

5. おわりに

以上は、会話原稿のほんの一部に過ぎないが、A会の動物愛護活動や上げ馬神事への取り組みについて語る伊藤氏の生の声からは、本プロジェクトの問いに関連する多くの事実関係を明らかにすることができた。

なかでも報告者が注目したいのは、A会と動物行政との関わりの深さである。環境省が動物愛護管理法の運用と改善を目的に主導する動物愛護管理推進政策では、確かに動物愛護団体やボランティアの民間協力者として活用することを前提にしているが〔環境省2013〕、A会の担う役割はその前提をはるかに超えているように読み取れる。伊藤氏は、一方で日本の動物愛護団体の意見を取りまとめて代弁することを目指しながら、もう一方で専門家、関係者として環境省や国会議員らと連携を築くことで、日本の動物法を「本物」にすることを信念としていた。これに伴う活動として、動物愛護管理法が正しく運用されているかの現場チェックや問題事例の収集があり、そこで上げ馬神事は重要事例として登場していた。伊藤氏はこうした活動が功績として評価され、環境大臣より動物愛護管理功労者表彰を授与している。

さらに本調査で明らかになったのは、2012年の法改正で動物虐待の定義として追記された「酷使」という文句が、上げ馬神事を事例に提案、議論、法律化されていたという伊藤氏の見解である。冒頭で紹介した

告発事案に至っては、当時の現行法の有効性をテストする意図と、その結果を次回の法改正に生かす意図があったことも明らかになった。上げ馬神事は、A会の活動によって、動物愛護管理法の成立と直接的に関わっていた。

以上は、「なぜ、動物愛護運動で伝統的行事が象徴的に扱われるのか？」という問いから発した研究で得られた結果であるが、肝心のこの問いへの答えは、本調査では完全には得られなかったと報告者は考える。今後の課題として答えを求めるなかで報告者が注目したいのは、伊藤氏の「伝統文化は、社会にとって良い象徴であらねばならない」という考え方である。氏は、動物愛護の精神、青少年の健全育成、人への安全性、などの何か「良い」ことがなければ、伝統文化として、少なくとも県指定の無形登録文化財としては認識すべきではないと述べていた。これは、近代的価値のみで伝統文化を議論していることに等しく、同様の思考様式が、前近代にルーツを持つ上げ馬神事の伝統的实践に対して、近代西洋の動物愛護思想を当たり前なこととして要求する姿勢にも見られるのではないだろうか。伝統的实践と近代的価値の相違を鑑みる議論が行われていないなかで、「時代に合わせるべき」だとして、上げ馬神事のような前近代的慣行を見た場

合、近代的視座にそぐわない要素を他の事例よりも多く見出すことができるのは、当然にも思える。

注

- 1) A会のウェブサイトより。
- 2) A会のウェブサイト、伊藤氏への聞き取り調査より。
- 2) 2015年、多度町における講習会において県庁職員談。
- 4) 会話原稿からの抜粋。文章化に必要な修正を加えた。「……」は省略の意味。()は阿部補。
- 5) C会とU会もすでに解散している。

参考資料

- 環境省編 2012『中央環境審議会動物愛護部会 動物愛護管理のあり方検討小委員会 第20回議事録』<http://www.env.go.jp/council/14animal/y143-20a.html> (参照2016-11-1)
- 環境省編 2013『動物の愛護及び管理に関する施策を総合的に推進するための基本的な指針 最終改正版』https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/laws/guideline_h25.pdf (参照2016-11-1)
- 衆議院調査局環境調査室 2012『動物の愛護及び管理をめぐる現状と課題』[http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_rchome.nsf/html/rchome/Shiryo/kankyoku_201208_dobutsuaigo.pdf/\\$File/kankyoku_201208_dobutsuaigo.pdf](http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_rchome.nsf/html/rchome/Shiryo/kankyoku_201208_dobutsuaigo.pdf/$File/kankyoku_201208_dobutsuaigo.pdf) (参照2016-11-1)
- 三重県教育委員会編 2011『教育委員会定例会会議録 平成23年1月20日』<http://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000089284.pdf> (参照2016-11-1)
- 多度大社 ウェブサイト <http://www.tadotaisya.or.jp/%E5%B9%B4%E4%B8%AD%E8%A1%8C%E4%BA%8B/%E5%A4%9A%E5%BA%A6%E7%A5%AD/> (閲覧2016-12-9)